追 手 門 学 院 大 学
心理学部紀要第19巻抜刷
2025年３月１日発行

論　　文

学童期における家族内での食卓体験と青年期における摂食障害傾向との関連性

－食卓経験尺度の信頼性・妥当性の検討－

馬場　天信　　平岡　　薫　　興津真理子

The Relation between the Mealtime Experience in the family during elementary school times and the Eating Disorder Tendency in Adolescence

Takanobu BABA　　Kaoru HIRAOKA　　Mariko OKITSU

追手門学院大学心理学部紀要
2025年３月１日，第19巻，21-37

論　文

学童期における家族内での食卓体験と青年期における摂食障害傾向との関連性
－食卓経験尺度の信頼性・妥当性の検討－

馬場　天信*　　平岡　　薫**　　興津真理子***

The Relation between the Mealtime Experience in the family during elementary school times and the Eating Disorder Tendency in Adolescence

Takanobu BABA　　Kaoru HIRAOKA　　Mariko OKITSU

要　約

本研究では，両親と子どもとの食卓場面における相互交流体験を多面的に捉える尺度を開発し，小学生時代（学童期）における食卓経験が青年期における摂食障害傾向への影響を明らかにすることを目的とした。

大学生513名を対象に調査を行い，筆者らが独自に作成した食卓経験尺度とEating Disorder Inventory（永田ら，1994）に回答させた。因子分析から小学生時代の食卓経験尺度として８因子を抽出し，さらにクラスタ分析を行って４群；すなわち，母子相互交流の視点から，相互交流希薄群，平均的相互交流群，肯定的相互交流群，相互交流不安定群の４群に分類した。２要因の分散分析の結果，肯定的相互交流群は他群と比較して「肥満恐怖・体型不満」「過食」が低く，「自己と他者に対する信頼感」「内部洞察」「無力感」が高いことが明らかとなった。また，重回帰分析の結果，「子どもの欲求優先」「食事に関するしつけ」が摂食障害の中核症状の高さに正の影響を与えていることが明らかとなった。

キーワード：食卓経験，摂食障害傾向，母子相互交流，EDI

*追手門学院大学心理学部　　**児童養護施設弘済みらい園　　***同志社大学心理学部

問　題

1970年代の調理技術の革新，ファーストフード店やコンビニエンスストアなどの出現により，現代の食環境は大きく変化している（今田，2004）。加えて，核家族化，男性の長時間労働，女性の社会進出，子どもの塾や習い事通いなど様々な社会環境や生活環境の変化要因が加わり，家庭における食卓場面も変化してきていると言える。足立（1983）が「孤食」を社会問題として取り上げてから既に数十年経過しているが，その後も「ぼっち飯」「便所飯」といった用語も一般社会で広まるなど，家族団らんの食事環境が失われつつあることが家庭外での食の問題に大きな影響を与えていることが考えられる。実際，岩村（2012）は家庭の食卓調査を行い，朝食や夕食がお菓子や菓子パンの食卓，持ち帰り弁当や惣菜類などがお皿に移し替えられずにそのまま出される食卓，菓子パンやカップ麺など主食が重ねて出され主食と副食の構成がない食卓など，現代家庭における食卓の実情を描写している。また長谷川（2012）や外山（2008）は，お互いの結びつきを確認したり，一緒に食べている人から受け入れられている実感が食の豊かさとし，共食による心理的意義やそこでの関係性を捉えることの重要性を示唆している。

食卓場面における関係性を考える際に重要となるのは一般的にはまず母親になると思われるが，外山（2008）は，子どもに食べる意欲のないときには，母親からの話しかけに子どもはほぼ応答せず会話が成立しないことが多いことを発見し，食事場面のやり取りは，母親がリードして行われるのではなく，母子の共同によって成立するとしている。また，伊藤ら（2007）は，親がどのようにお弁当を準備してくれたのかという幼少期のお弁当体験の肯定的評価が母親への同一化感情を高め，家族の共食体験の高さや摂食障害傾向に影響することを明らかにしている。あるいは，平井・岡本（2005）は，小学生児童と両親を対象とした調査結果から，子どもが母子結合を強く認知している母親ほど，栄養的な配慮を行い，子どもへ関心を持って関与していることを示唆し，更に，親との心理的結合性の高い子どもは，楽しく，安らぐ雰囲気があり，会話や手伝いを通して相互に関わりあうことが多い食事場面を家庭で体験していることを明らかにしている。他方，母子関係に限定せずに思春期における食卓場面における家族コミュニケーションが家庭での生活満足度や子どもの心理発達にとって重要であることを示唆する研究も幾つか報告されている。例えば，大谷ら（2000）は，中学生を対象として食生活体験が家庭生活満足度に及ぼす影響についてパス解析で検討した結果から「家庭生活満足度」に最も大きな影響を与えている生活体験は「食卓での家族とのコミュニケーション」であることを明らかにしている。また，大谷ら（2003）は，中学生を対象とした調査結果から，家族のコミュニケーションの場である食事時間に家族との楽しい心の交流を体験することが，子どもに依存欲求を満たしてくれる場所としての家庭という確固たる足場を持たせ，結果として青年期の自我同一性や独立意識の形成を促すことを明らかにしている。あるいは，日常的な母子関係や母親の養育態度が，食卓場面の雰囲気やしつけの在り方などに影響することも明らかとなっている（江崎・別府，2012；安藤・山田，

2004)。更に，土屋ら（2004）は，高校生を対象とした調査を行い，夕食孤食傾向及び別室孤食経験のある生徒は食卓を「コミュニケーションの場」及び「連絡の場」とイメージする者が少なく，別室孤食経験者は「説教の場」とイメージする者が多いことを報告し，高校生の孤食は家族関係や食卓に対する否定的なイメージが影響していることを示唆している。以上のように，学童期から思春期・青年期という広範囲のライフサイクルにおいて，食を介した親子のやり取りや家族との食卓での交流が，子どものその後のパーソナリティの問題や心身の健康に影響を与えうることを示唆するものであり，とりわけ食事を巡る母子を中心とした相互コミュニケーションの重要性を明らかにしていると言える。

臨床心理学の領域で食に関するメンタルヘルスの問題は，主に摂食障害で取り扱われてきた。この障害は一般的に思春期，青年期の女性が発症することが多く，就職や結婚後に発症するなど発症の年齢幅が広がりを見せている（切池，2009)。摂食障害の病理には，無力感の存在（Bruch，1978／1979）や葛藤を抱え悩むことができずに行動で処理しようとするパーソナリティの問題（松木，2008）が指摘されている。そして，このような摂食障害の問題を臨床的に扱う際に注目されるのは主に早期の母子関係である。例えば，乳幼児期において哺乳や摂食に問題を有する母子の中でinfantile anorexiaという摂食拒否を持つ乳幼児グループは，母子葛藤が高く，哺乳場面での母子相互作用に問題があることや乳幼児期の親との相互作用のズレが摂食障害の発症に影響していることが報告されている（Chatoor et al.,1997；Bruch, 1978／1979)。また，母親の過保護や過干渉が病因として作用する可能性（石川ら，1960）や母親の情緒応答性の機能不全（山岡，1999)，あるいは，母親が子どもの甘えを許容できず子どもがさびしい思いを抱えざるを得ない親子関係（大場ら，2002）などが指摘されている。一方で，摂食障害の発症は母親との関係のみに還元できるものではなく，家族内で受身的で主導性が乏しい父親の特徴も影響することが示唆されている（石川ら，1960)。家族構造や家族交流に着目した見解では，自他境界の曖昧なコミュニケーション，病気や変化に対する否認（Bruch, 1978／1979)，あるいは，家庭内の交流が纏綿状態，葛藤回避的，変化しにくさ，子供中心ではあるが過保護（Minuchin et al.,1978／1987）が指摘されている。また，家族療法の視点から食卓場面に注目した村上ら（1991）は，不食を続けている摂食障害患者の食行動と家族の相互作用の観察は，家族療法をすすめていくうえで重要な意味をもつことを指摘し，食卓セッションでの微視的な分析に基づき，患者の食行動は家族の葛藤や問題の所在を曖昧ながらも示していると言及している。以上のように，食卓を巡る家族の相互交流や母子関係の在り方に注目することは，摂食障害に対する臨床心理学的介入を考える際にとりわけ重要な意味を持つと言える。

一方，本邦で行われている食卓研究では，過去の食卓場面の雰囲気が思春期，青年期の心の健康，学校不適応傾向，両親との心理的結びつきに影響すること（川崎，2001；加曽利，2005；平井・岡本，2006)，小学生時の食事中の楽しい会話が青年期の健康状況に関連すること（森脇ら，2007）が報告されている。また，中学生を対象に調査を行っている千須ら（2014）は，朝食を毎

日摂り，共食を心がけ，家族で会話のある楽しい夕食の時間を過ごすことが，女子では良好なボディイメージやダイエット行動の予防，男女ともに高いセルフエスティームと関連することを示唆している。一方，計量的な調査研究ではないものの，複数の摂食障害患者の食卓に注目し，賑わいや暖かみ，親しみ，なごみなどが欠如した，安心感がなく緊張感の高い食卓の雰囲気を特徴としているとの報告がなされている（滝川, 1976；滝川 1983）。また，松木ら（1982）は，神経性摂食障害患者の家庭では，発症前から食卓状況をめぐって家族成員の孤立傾向とも呼べる様態がみられ，特に父親が家庭での夕食で不在がちであり，発症前から，家族の集合性や家族間交流のどちらも低下していることを示唆している。更に，生野（1989）は，神経性やせ症の患者は，家庭でばらばらに摂食することが多く，食事の雰囲気が和やかでない食卓状況にあることを示唆している。実際に摂食障害傾向と食卓での親子関係の関連性を検討した調査研究は幾つか報告されているが，田中（2003）は，日常的な親子の関わりよりも，より限定された家庭における食卓場面での親との関わりが，EAT-26で測定される青年期の摂食障害傾向に影響を与えることを明らかにしている。この研究では，母親と父親の食卓場面における実際の行動をそれぞれ因子分析し，母親については要求の察知・快反応，支配的なしつけ，嫌いな食物の提供，料理の手抜き因子を，父親ではコミュニケーションの触媒，食事の強制・注意の付与，圧迫・緊張感の付与，嫌悪感の付与，食物の提供因子を抽出し，男性では料理の手抜き，コミュニケーションの触媒，食事の強制注意の付与，圧迫・緊張感の付与が，女性では料理の手抜き，支配的なしつけ，嫌悪感の付与がそれぞれの摂食障害傾向を説明することを明らかにしている。また，母親からの行動よりも父親からの行動が摂食障害傾向により影響を与えていること，そして同性の親の食卓場面における行動が摂食障害に関係していることも明らかにしている。また，女子大生を対象に食事しつけ体験尺度や家族との食卓交流尺度を作成しEAT-26で測定する摂食障害傾向との関連性を検討した齋藤（2004）は，苦手食べ物の強制，マナーの強調，間食の自由，食事の好みの反映，食べる順番の自由，食事量の制限，間食の強制の６因子を抽出し，更に，食事こだわり尺度はとして，栄養バランス・カロリーの重視，マナーの重視，食費の節約，食事の簡便化，食事雰囲気の重視，食事情報の重視の６因子を抽出している。そして２つの調査で検討を行い，食事雰囲気の重視が摂食障害傾向に負の影響を明らかにすると同時に，摂食障害傾向を助長させている母親の行動としては，「母親の食事情報」と「母親の好み反映」であることを報告している。

食卓場面や食卓状況を測定する尺度の開発は，2003年の調査で中学生以前の食事場面と母親の行動を５因子で測定する尺度（平井・岡本, 2006）や1995年の調査で小学生時代の食卓状況や母親の実際の食事作りを各３因子で測定する尺度（安藤・山田, 2004）が報告されており，いずれも食事中の雰囲気，母親の料理への配慮や工夫に関する母親の行動面に注目した内容で構成されている。あるいは，田中（2003）が思春期の青年を対象に1999年の調査で父親と母親の食事場面での行動的関与に注目した尺度を作成している。また，齋藤（2004）は，女子大生を対象に現時点での，食卓でのしつけと食事へのこだわりに注目した尺度をそれぞれ６因子で作成している。

いずれの尺度も食事内容そのものや食卓で母親がとる実際の行動に焦点化した尺度となっており，コミュニケーションや相互交流を子どもがどのように体験したかについては限定的にしか捉えられておらず，調査の実施年代も2000年前後での調査が大半であり，現代的な食卓の実情が反映されていない可能性がある。本研究では，摂食障害傾向に影響する時期として学童期における食卓経験を捉えることとし，その相互交流をどのように主観的に体験していたかを捉えることに注目し，新たな食卓経験尺度を開発することを目的としているが，これらに注目することは，摂食障害を対象とした様々な臨床的介入に新たな視点を提供するだけではなく，感情教育や家族心理学，発達心理学の観点から現代における食育や家族コミュニケーションの在り方を考えることにも寄与すると思われる。

目　的

本研究では，現代の家庭における子どもが認知した母子相互交流を中心とした食卓経験尺度を作成し，小学生時代の家庭における食卓経験の特徴を明らかにすることを第一の目的とした。また，小学生時代の食卓経験の諸側面が青年期における摂食障害傾向に及ぼす影響を明らかにすることを第二の目的とした。

方　法

調査対象者と調査手続き[1)]：近畿圏内の３つの私立大学生を対象に2014年に調査を実施した。有効回答数は513名（男性273名，女性240名，平均年齢は19.5歳，SD＝1.27）であった。調査票は，講義前後に配布し，その場で調査者が回収または後日指定の回収箱に投函するよう依頼した。調査実施に関しては，本調査の目的と回答が任意であること，精神的負担を感じた場合途中でやめられることについて文章と口頭で説明した。個人情報保護の観点から，調査協力に同意する場合には調査票とは別に同意書を提出させ調査票と同意書は別々に回収を行った。

食卓経験尺度：田中（2003）の食事場面での母親の行動尺度，『家族の勝手でしょ！』（岩村，2012），『普通の家族が一番怖い』（岩村，2010）を参考に食卓経験を測定する76項目を独自に作成した。なお，記述内容を参考に調査票を作成することについて岩村暢子氏（大正大学地域構想研究所）の許可を得た。本調査では私立大学生286名（男性105名，女性181名，平均年齢20.0歳，SD＝2.20）を対象とした予備調査で抽出された項目のうち６項目の項目表現を一部修正した57項目を使用した。調査では「あなたの小学生時代の家庭における食卓場面を思い出しながら，

1）なお，本調査は追手門学院大学倫理委員会の承認（2014-6）を受けると同時に，配布大学における部局内承認を受けて実施した

自分自身にあてはまる程度について回答してください」と教示を行い，「全くあてはまらない＝１」から「非常にあてはまる＝５」の５件法で評定させた。なお，母親が食事を作っていることを前提とした内容となっているが，食事の作り手が主に母親であるという社会基本調査の指摘を採用したものであり，母親以外の人が食事を作ることを否定するものではないことを文章で明記し，主な作り手が母親以外の場合は誰が作ってくれていたのかについて回答させた。

摂食障害尺度：Garner et al.（1983）が開発したEating Disorder Inventoryを，永田ら（1994）が邦訳したEating Disorder Inventory（EDI）を用いた。この尺度は，摂食態度や体型に対する態度に関する「やせ願望」「過食」「体型不満」の下位尺度と，「無力感」「完全主義」「内部洞察」「成熟恐怖」「対人不信」の摂食障害患者にみられる基本的な心理的特徴を包括的に捉えられる下位尺度の８因子計64項目で構成されている。なお，原版であるGarner et al.（1983）は，頻度に応じた６段階で回答させているが，本調査では，後の多変量解析を視野に入れ間隔尺度である「全くあてはまらない＝１」から「非常にあてはまる＝５」の５件法に変えて評定させた。

結　果

食卓経験尺度の因子構造および内的整合性

項目選定のために行った予備調査の分析方法と同じく，主因子法，Varimax回転による因子分析を行い，８因子50項目が抽出された（表１）。なお，Promax回転でもほぼ同様の因子構造であったため，因子の独立性を前提にすることを重視しVarimax回転の結果を採用した。第１因子は子どもの欲求を優先する項目のため「子どもの欲求優先」とした。第２因子は食事を大切に考え手間をかける母親の行動を表わす項目であるため「食事を重視する母親」とした。第３因子は食事に関するしつけの厳しさを表す項目であるため「食事に関するしつけ」とした。第４因子は「食事中，私はその日の出来事を自由に話していた」が正の負荷量，「家族そろって食事をしていても会話をすることはなかった」が負の負荷量を示しており，家族のコミュニケーションの在り方を示す項目であるため「コミュニケーション」とした。第５因子は母親が食事の準備や後片付けをしている時の雰囲気を察知している項目であったため「母親の雰囲気察知」とした。第６因子は母親の状態を察知して母親への気遣いをしているという項目内容であるため「母親への気遣い」とした。第７因子は，父親がいるかいないかで食事内容に影響があるという項目内容であるため「父親の影響」とした。第８因子は「食事中，父親と母親は楽しそうに話していた」「母親はご飯やおかずの食べたい量を聞いてくれ，それに合わせて調整して出してくれていた」など，家族が相手を思いやり家族の中であたたかい雰囲気が感じられる内容の項目であったため「あたたかい雰囲気」とした。８因子での累積寄与率は36.69%（分散18.34）であり，Cronbachの α 係数から下位尺度の内的整合性が確認された。

表１　食卓経験尺度の因子分析結果（Varimax回転後の因子行列）

項目番号	項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	共通性
第1因子	**子どもの欲求優先　（α=.78）**									
39	家族が食べている食事を食べずに，自分が買ってきたものを食べることを許されていた。	**.66**	-.11	-.06	.00	.02	.04	.03	-.09	.47
45	食事が出来上がった後に食事内容が嫌いなものだった時に，食事の代わりに好 きなものを食べることを許してもらえた。	**.63**	.05	-.11	.09	-.03	.01	.16	-.04	.44
3	夜にお菓子を自由に食べることができた。	**.56**	.03	-.19	.01	.08	-.09	-.01	.15	.38
1	食事時に勉強や遊びの途中であれば，そのまま続けて皆と一緒に食事をしないでも許してもらえることがあった。	**.52**	-.07	-.12	.10	.03	-.07	-.08	.04	.31
19	食事が出来上がった後に違うものが食べたいと言えば，それを用意してくれることがあった。	**.48**	.19	-.02	-.02	-.13	.06	.10	-.10	.30
2	食事時でも他のこと（ゲーム、マンガ、スマートフォンなど）をしながら食事をしていても注意されることはなかった。	**.46**	-.10	-.07	.21	.03	-.07	-.06	.03	.28
41	家族全員が家にいる時に，それぞれバラバラに食事をすることがあった。	**.42**	-.17	.05	.03	.09	.04	-.01	-.24	.28
37	食事と一緒に炭酸飲料やスポーツドリンクを飲むこともあった。	**.42**	-.10	-.04	-.09	.08	.02	.07	-.02	.21
38	食卓では，好きなものを好きなだけ選んで食べることができた。	**.42**	-.08	-.23	-.13	-.01	.13	.13	.10	.29
8	お金を渡されて好きなものを買って食べるようにと言われていた。	**.37**	-.07	.09	.02	.11	.21	.14	-.20	.27
33	食事前だからおやつは控えるようにと注意されなかった。	**.36**	-.09	-.13	.12	-.05	.01	-.02	-.10	.18
7	食事に何が食べたいかを聞かれインスタント食品や市販のお弁当などを食べたいと言えば，母親は喜んでそれを出してくれていた。	**.35**	-.12	-.07	-.01	.06	.13	.20	-.10	.21
第2因子	**食事を重視する母親　（α=.74）**									
34	母親はいつも品数が多く栄養バランスの良い食事を作り続けることにこだわっていた。	-.17	**.64**	.09	.05	-.07	-.05	-.12	.14	.49
25	母親は新しいメニューをとりいれようと意識していた。	-.06	**.60**	.06	-.14	.02	.04	-.06	.03	.39
22	私が嫌いな食材は食べやすいよう工夫して料理してくれていた。	.00	**.58**	-.11	-.14	-.07	.05	.07	.02	.39
27	食事を作っている母親の側に行くと，料理のことや食材のことについてよく教 えてくれていた。	.02	**.51**	-.01	-.29	-.12	.25	.05	.03	.42
21	ファーストフードやコンビニで買って食べなくてもいいように，母親の作った 軽食（おにぎりやおやつなど）を持たされていることがあった。	.06	**.42**	.10	-.06	.04	.03	.06	.14	.22
32	インスタント食品には野菜を刻んで加えてくれていたり一工夫されていた。	-.12	**.42**	.06	-.08	-.11	.14	-.11	.03	.24
24	母親は決まった時間に規則正しく食事をすることにこだわっていた。	-.19	**.41**	.19	.07	-.02	-.06	.03	-.04	.25
47	私の誕生日の時には私の好きなものを母親が手づくりで準備してくれていた。	-.09	**.40**	-.03	-.23	-.03	.02	.07	.38	.37
36	食卓に出る料理はいつもお皿に全部盛り付けられていた。	-.18	**.34**	.00	.08	-.06	-.16	-.08	.14	.21
第3因子	**食事に関するしつけ　（α=.76）**									
28	私が食事を残すと母親に叱られ，全部食べるまで私1人で食べていることがあ った。	-.11	.07	**.77**	.10	.06	.03	.11	.00	.63
14	私が嫌いなものを食べるまで母親に席を離れることを許されない時があった。	-.20	.07	**.70**	.06	.06	.00	.05	.00	.54
29	食事時にお腹がすいていなくても，母親がせっかく作ったのだから食べなさいと無理やり食べさせられる時もあった。	-.07	.00	**.60**	.11	.20	.10	.05	.00	.43
18	私が嫌いなものを残しても叱られることはなかった。	.32	.00	**-.53**	.10	.01	.01	.15	.02	.42
20	食事時にお腹がすいていないと叱られたことがあった。	-.05	.11	**.46**	.21	.17	.09	.13	-.05	.32
46	食事はご飯，味噌汁，おかずとバランスよく食べなさいなど食べ方に関するしつけが厳しかった。	-.24	.28	**.33**	-.05	-.08	.15	.06	.06	.28
42	母親はたくさん食べることを期待していたため，あまり食べない私が否定されているような気持ちがすることがあった。	.11	.00	**.32**	.29	.09	.23	.09	-.05	.27
4	食事の仕方について注意されるため食事中いつも緊張していた。	-.17	.08	**.32**	-.01	.01	.28	.10	-.09	.24

項目番号	項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	共通性
第4因子	**コミュニケーション　(α=.71)**									
57	食事中，私はその日の出来事などを自由に話していた。	-.11	.18	-.04	**-.60**	-.03	-.03	-.01	.28	.48
54	家族そろって食事をしていても会話をすることはなかった。	.24	-.03	.08	**.58**	.01	.07	.03	-.25	.47
44	食事中，親の話を聞いており私が話すことはなかった。	.07	.01	.10	**.55**	.00	.15	.08	-.14	.37
10	母親に「おいしい，おいしくない」と食事の感想を自由に話していた。	.04	.26	-.05	**-.53**	-.03	.06	.04	-.01	.36
16	母親は忙しそうだったので，食べたいものを作って欲しいとリクエストすることはなかった。	-.03	-.13	.09	**.43**	.17	.28	-.03	.03	.32
第5因子	**母親の雰囲気察知　(α=.78)**									
49	食事の準備や後片付けをしている母親は不満に思っているような感じがした。	.11	-.04	.22	.12	**.73**	.19	.11	-.02	.66
26	母親は食事の準備や後片付けをめんどうくさそうにしていた。	.03	-.17	.10	.03	**.67**	.13	.13	-.18	.56
40	母親は食事の準備や後片付けをしている時，疲れているようだった。	.08	-.02	.12	.01	**.67**	.14	.06	.03	.49
53	食事を作っている母親はいつもいきいきしているように見えた。	.05	.37	.04	-.10	**-.48**	.05	-.13	.33	.52
第6因子	**母親への気遣い　(α=.64)**									
30	母親が疲れているのを見てご飯を作って欲しいと言えなかったため，自分で作 らねばと思う時もあった。	.16	.00	.10	.10	.18	**.62**	-.02	-.02	.46
31	私がそんなに好きでない食べ物でも，母親が期待しているように美味しいと喜ばないといけないような気がしていた。	-.01	-.02	.14	.23	.17	**.50**	.14	-.07	.37
15	食事の準備や後片付けをしている母親を労わないといけない気がしていた。	-.02	.18	.01	.01	.03	**.49**	.03	.12	.29
55	食事時に母親の機嫌が悪いと，私が気を使わないといけないような気がしていた。	-.04	.07	.06	.32	.27	**.38**	.22	-.01	.37
第7因子	**父親の影響　(α=.66)**									
9	食事の内容は父親がいるかいないかで決まることがあった。	-.01	.05	.08	.03	.12	-.05	**.70**	.06	.52
23	父親が夕飯に帰ってこない時は簡単な食事になることがあった。	.04	-.13	.06	.04	.09	.03	**.69**	.06	.51
5	父親が夕飯に帰ってこない時は外食する時があった。	.21	-.04	.09	-.09	.03	.20	**.38**	-.11	.26
56	父親がいない時には食事が豪華になることがあった。	.22	.05	.06	.08	.05	.17	**.37**	-.04	.23
第8因子	**あたたかい雰囲気　(α=.57)**									
50	食事中，父親と母親は楽しそうに話していた。	-.12	.08	.08	-.21	-.23	-.10	.03	**.47**	.35
52	体調が悪い時はおかゆや鍋焼きうどんなど体調に合わせて消化の良いものを用意してくれていた。	-.23	.20	-.13	-.17	-.01	.07	-.06	**.41**	.32
48	食事は家族そろって同じ料理を食べることになっていた。	-.37	.19	.08	-.17	-.02	.10	-.01	**.40**	.37
51	母親はご飯やおかずの食べたい量を聞いてくれ，それに合わせて調整して出してくれた。	.16	.23	-.16	-.27	-.06	.04	.08	**.38**	.33
説明分散		3.61	2.88	2.69	2.31	2.11	1.68	1.63	1.43	
寄与率		7.22	5.76	5.39	4.63	4.21	3.37	3.26	2.85	

EDI尺度の因子構造および内的整合性

永田ら（1994）の構造にあわせて因子数を８に固定し，主因子法，Varimax回転による因子分析を行い，最終的に８因子60項目をEDI尺度として採用した。各下位因子は，第１因子から順に「肥満恐怖・体型不満」,「自己と他者に対する信頼感」,「内部洞察」,「成熟恐怖」,「無力感」,「体型受容」,「完全主義」と命名した。Cronbachの α 係数は，α = .59～.93であり内的整合性は確認された。なお，永田ら（1994）のEDIの日本語版原版であるEDI邦訳版は臨床的妥当性を重視した尺度となっており因子分析は行われていないが，間隔尺度に回答形式に変えた本調査では永田ら（1994）のEDIと因子構造や構成項目がやや異なった。

食卓経験尺度に対するクラスタ分析

食卓経験尺度の下位尺度の組み合わせパターンから食卓経験の特徴をより詳細に捉えるためにWard法によるクラスタ分析を行い，クラスタの解釈可能性から４つのクラスタが得られた（図１）。食卓経験尺度に表れている母子の相互交流の在り方という視点から解釈を行い，第１クラスタは，母子共にお互いに対する関心の薄い傾向が表れているため「相互交流希薄群」とした。第２クラスタは，母親の食事を重視する傾向や子どもが母親の雰囲気を察知したりする傾向など，どの尺度も平均的であり，度数も最も高い群であることから「平均的相互交流群」とした。第３クラスタは，母親の食事を介した子どもへの関心があり，子ども側も気を使うことなくコミュニケーションをとれていることが表れている群であるため「肯定的相互交流群」とした。第４クラスタは，母親が子どもの欲求を優先する傾向が特に高い，一方で食事に関するしつけの傾向も高く，母親の食事を介しての子どもへの関わりはアンビバレンスで一貫性にかけており，子どもは母親の雰囲気を察知したり気遣いを過剰にする傾向があることが表れている群であるため「相互交流不安定群」とした。

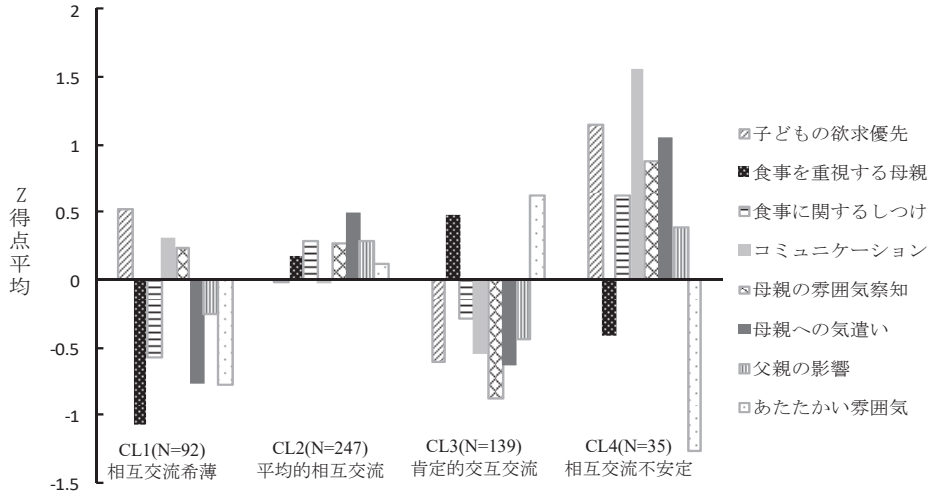

図１　食卓経験の各クラスタの特徴

食卓経験のタイプ・性別要因が摂食障害傾向に及ぼす影響

EDIの下位尺度を従属変数とし，食卓経験尺度のクラスタと性別による4×2の２要因分散分析を行い，主効果が有意だった場合にTukey法による多重比較を行った（表２）。分散分析の結果，食卓経験クラスタが有意であったのは「肥満恐怖・体型不満」「自己と他者に対する信頼感」「内部洞察」「過食」「無力感」「体型受容」「完全主義」であった（$F(3, 505) = 4.47 \sim 11.14, p < .001$）。また性別の主効果が認められたのは「肥満恐怖・体型不満」（男性25.70, 女性37.79）「内部洞察」（男性24.37, 女性27.92）「過食」（男性16.92，女性20.15）「成熟恐怖」（男性

16.71, 女性15.25)「無力感」(男性9.58, 女性10.37)「体型受容」(男性8.52, 女性7.19) であり ($F(1, 505) = 4.08 \sim 92.13$, $p < .001 \sim .05$),「成熟恐怖」,「体型受容」以外はすべて女性が高い得点を示した。多重比較からは「肥満恐怖・体型不満」において肯定的相互交流群よりも平均的相互交流群，相互交流不安定群の得点が高く，「自己と他者に対する信頼感」において相互交流希薄群，平均的相互交流群，相互交流不安定群よりも肯定的相互交流群の得点が高く，相互交流希薄群よりも平均的相互交流群の得点が高かった。「内部洞察」では肯定的相互交流群よりも相互交流希薄群，平均的相互交流群，相互交流不安定群の得点が高く，「過食」では肯定的相交流群よりも平均的相互交流群，相互交流不安定群の得点が高く，相互交流希薄群よりも相互交流不安定群の得点が高かった。「無力感」では肯定的相互交流群の得点よりも相互交流希薄群，平均的相互交流群，相互交流不安定群の得点が高く，「体型受容」では平均的相互交流群よりも肯定的相互交流群の得点が高く，「完全主義」で相互交流希薄群，肯定的相互交流群よりも平均的相互交流群，相互交流不安定群の得点が高かった。なお「自己と他者に対する信頼感」において交互作用が有意であったため ($F(3, 505) = 2.95$, $p < .05$)，単純主効果の検定を行った結果，男性における食卓経験クラスタの単純主効果が有意であり ($F(3, 505) = 10.63$, $p < .001$)，相互交流希薄群 ($M = 27.34$) よりも平均的相互交流群 ($M = 31.58$)，肯定的相互交流群 ($M = 33.78$) の得点が高かった。また，女性における食卓経験クラスタの単純主効果が有意であり ($F(3, 505) = 3.83$, $p < .05$)，相互交流不安定群 ($M = 31.58$) よりも肯定的相互交流群 ($M = 33.29$) の得点が高かった。一方，食卓経験クラスタの相互交流希薄群における性別の単純主効果が有意であり ($F(1, 505) = 7.51$, $p < .01$)，男性 ($M = 27.34$) よりも女性 ($M = 30.87$) の得点が高かった。

表２　食卓クラスタと性別要因によるEDI得点の分散分析結果

食卓経験クラスタ	CL 1 相互交流希薄		CL 2 平均的相互交流		CL 3 肯定的相互交流		CL 4 相互交流不安定		主効果			交互作用	多重比較
N(Male, Female)	N=92 (50, 42)		N=247 (135, 112)		N=139 (66, 73)		N=35 (22, 13)		性別		食卓クラスタ		
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD					
EDI下位尺度													
肥満恐怖・体型不満	30.80	(13.30)	31.78	(12.37)	27.85	(11.76)	34.15	(13.85)	92.13 ***	(M < F)	7.80 ***	.20	CL 3 < 2, 4
自己と他者に対する信頼感	28.95	(6.62)	31.70	(5.65)	33.52	(6.59)	29.75	(6.97)	.03		11.01 ***	2.95 *	CL 1, 2, 4 < 3 / CL 1 < 2
内部洞察	26.13	(7.09)	25.75	(6.70)	23.66	(7.85)	28.27	(6.51)	20.12 ***	(M < F)	6.75 ***	.21	CL 3 < 1, 2, 4
過食	17.57	(6.20)	18.48	(6.11)	16.22	(5.85)	21.06	(6.43)	22.74 ***	(M < F)	9.61 ***	.82	CL 3 < 2, 4 / CL 1< 4
成熟恐怖	16.85	(4.88)	16.46	(4.06)	15.55	(4.48)	15.54	(4.03)	8.75 **	(F < M)	2.43	.69	
無力感	10.53	(3.63)	9.66	(3.20)	8.71	(3.66)	10.72	(3.23)	4.08 *	(M < F)	7.34 ***	.65	CL 3 < 1, 2, 4
体型受容	7.75	(3.01)	7.81	(2.71)	8.68	(3.34)	7.45	(2.67)	16.01 ***	(F < M)	4.47 **	.02	CL 2 < 3
完全主義	14.27	(4.32)	15.87	(3.57)	14.04	(3.94)	16.80	(3.11)	.14		11.14 ***	.69	CL 1, 3 < 2, 4

注1：各食卓クラスター群における性別ごとの平均値とSDは必要箇所は文中記載とし表2では割愛した。　　*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

食卓経験尺度とEDI尺度の因果関係の検討

食卓経験下位尺度得点が摂食障害傾向に与える影響を検討するために，強制投入法による重回帰分析を行った。実際の分析は８つの下位尺度全てについてそれぞれ重回帰分析を行ったが，本結果では摂食障害の中核的な症状を表わす「肥満恐怖・体型不満」「内部洞察」「過食」の３つ

の因子の結果を表３に示した。分析の結果，男性は「子どもの欲求優先」「母親への気遣い」が高いと「肥満恐怖・体型不満」が高まり，「子どもの欲求優先」「食事に関するしつけ」「父親の影響」が高いと「過食」が高まることが示された。女性は「子どもの欲求優先」「食事に関するしつけ」「母親への気遣い」が高いと，「肥満恐怖・体型不満」が高まり，「コミュニケーション」が低いと「肥満恐怖・体型不満」が高まること，そして「子どもの欲求優先」「食事に関するしつけ」が高いと「過食」が高まること，「コミュニケーション」「母親の雰囲気察知」が高いと「内部洞察」が高まることが明らかとなった。なお，全体の説明率を示すR^2値は，３尺度とも男性より女性の方が高かった。

表３　EDI下位尺度を目的変数，食卓尺度を説明変数とする，重回帰分析結果（強制投入法）

説明変数	標準偏回帰係数(β)					
	男性			女性		
	肥満恐怖 体型不満	過食	内部洞察	肥満恐怖 体型不満	過食	内部洞察
子どもの欲求優先	.14 *	.21 **	.07	.25 **	.26 **	.13
食事を重視する母親	-.03	-.05	-.06	-.04	.08	.10
食事に関するしつけ	.09	.19 **	.12	.25 **	.27 ***	.07
コミュニケーション	-.05	-.01	.06	-.15 *	-.05	.18 *
母親の雰囲気察知	.01	-.03	.10	-.06	.10	.17 *
母親への気遣い	.16 *	.07	.03	.15 *	.13	.03
父親の影響	.05	.14 *	.06	.07	.01	.04
あたたかい雰囲気	-.07	.02	.02	-.02	-.02	.04
R^2	.07 *	.11 ***	.06 *	.11 *	.16 ***	.11 **

*** $p < .001$,　** $p < .01$,　* $p < .05$

考　察

食卓経験尺度の特徴と相互交流の分類について

子どもが食卓場面において母子を中心とした相互交流をどのように主観的に体験しているかに注目し最終的に８因子を抽出した。食卓状況や食事場面での行動などに重点をおいて作成された平井・岡本（2006）や安藤・山田（2004），田中（2003）と類似した因子として抽出されたのは「食事に関するしつけ」「食事を重視する母親」「あたたかい雰囲気」の因子であった。中学生以前の食卓場面での経験を尋ねる尺度（平井・岡本, 2006）や小学生時代の食卓状況を尋ねる尺度および母親の食事作りを尋ねる尺度（安藤・山田, 2004）や女子大生を対象に現在の食卓におけるしつけと食事への拘りに注目した尺度（齋藤, 2004）では，食事中の雰囲気や料理への配慮や工夫に関する親の行動が捉えられており，これらの因子は時代に限らず共通している側面だと考えることができる。一方，本調査では「子どもの欲求優先」「コミュニケーション」「母親

の雰囲気察知」「母親への気遣い」「父親の影響」が新たに抽出されたが，先行研究で食卓における雰囲気の悪さや良さ，コミュニケーションといった因子が細分化された形で因子が抽出され，母親が子どもの欲求を優先する側面については今回新たに抽出された特徴と言える。「子どもの欲求優先」は，家族全員が家にいる時にそれぞれがバラバラで食事をすることや，食事時に勉強や遊びの途中であれば，そのまま続けて皆と一緒に食事をしないでも許してもらえること，あるいは食事が出来上がった後でも違うものが食べたいと言えばそれが許容されることなど，現代の家庭における食卓の特徴を捉える内容で構成されたと言える。田中（2003）は，食事場面の母親の行動認識を評価する尺度の「料理の手抜き因子」について，子どもによって，母親が料理の手抜きをしていると思われる要因を明らかにする必要性があると述べているが，「子どもの欲求優先」因子は，「お金を渡されて好きなものを買って食べるようにと言われていた」や「食事に何が食べたいかを聞かれインスタント食品や市販のお弁当を食べたいと言えば，母親はそれを喜んで出してくれていた」など，子どもが好きなものを買ったり，食べたりできるように母親は子どもの欲求，気持ちに添っている行動ではあるが，実際には，母親が食事に手間をかけないことにつながっていることも意味する因子だと言える。子どもは，その時は好きなものを食べられるのでその時点の欲求は満たされるが，その母子のやり取りによって，子どもは母親から自分のことを思いやって食物を提供されているとは感じにくく，子どもが母親の料理を手抜きと評価することにつながるのではないかと推察される。母親が子どもに食事に関するしつけを行わずに子どもの欲求を優先する傾向（岩村，2012）や家族が皆家にいる時でも一緒に食事をしない孤食（今田，2005）といった食卓の特徴は，従来の研究では項目として含まれておらず，本研究によって明らかになった現代の食卓経験の新たな側面だと言うことができる。一方，「母親の要求察知」や「母親への気遣い」といった因子は，田中（2003）の行動尺度の「要求の察知・快反応」と類似点が多い。田中（2003）は，母親は私の好きな食べ物と嫌いな食べ物が何かを知ってくれているや，母親は私に何が食べたいかを聞いてくれるなど，母親が子どもの要求を察知してそれに合わせた行動をしてくれるのかを捉えた因子であるが，本調査で抽出されたこの2つの因子は，食卓場面において母親がどのような気持ちで食事の準備や後片付けをしたり食事を提供しているのか，子どもが母親の行動から母親の気持ちや期待を感じ取り気遣いをしている側面が反映されている尺度と言える。

食卓場面のタイプ分類については恩村（2013）が児童期の食卓場面について「子ども尊重型」「しつけ重視型」「相互交流希薄型」「家族団欒型」「雰囲気不良型」の５つに分類しているが，その構成要素は，会話内容，会話頻度，雰囲気，食事への配慮からの分類であり，雰囲気は「暗い－明るい」と観念的な捉え方である。本研究では，食卓場面の母子相互交流の分類として「相互交流希薄群」「平均的相互交流群」「肯定的相互交流群」「相互交流不安定群」の４タイプが抽出された。「相互交流希薄群」は，母親は子どもの欲求を優先する傾向，料理に手間をかけない傾向があり，子どもは母親の雰囲気察知や母親への気遣いが低い傾向にあり，母子がお互いに干

渉し合わない，無関心ともいえる交流が特徴であり，岩村（2012）の指摘する食事や食事に関するしつけに関心の薄い現代の母親の特徴が表れている群と言えるであろう。一方「相互交流不安定群」は，母親は子どもの欲求を優先する傾向も食事に関するしつけを行う傾向も高いが，食事に手間をかけておらず，母親の子どもへの関わりは一貫していない。そのような一貫性のない母親に対して子どもは，母親の雰囲気や気遣いをする傾向が過剰に高くなっており，この群は母子の相互葛藤が最も強いと考えられる。

食卓場面での母子相互交流タイプと青年期の摂食障害傾向

分散分析から，小学生時代の家庭における食卓場面での母子相互作用の幾つかのタイプが，「成熟恐怖」を除く青年期の摂食障害傾向の得点が高いことが明らかとなった。多重比較では最も健康度が高いと思われる「肯定的相互交流群」と他の３群との間でEDI下位尺度に違いが認められるものが散見されたが，顕著な違いは「肯定的相互交流群」と「相互交流不安定群」，「平均的相互交流群」との間で認められたと言える。一方で「相互交流希薄群」は「内部洞察」「自己と他者に対する信頼」「無力感」等で「肯定的相互交流群」との違いが認められたが，「肥満恐怖・体型不満」「過食」「成熟拒否」といった摂食障害の中核症状では違いが認められなかった。中核症状で摂食障害傾向が高くなった「相互交流不安定群」と「平均的相互交流群」に共通するのは，母親への気遣いや母親の雰囲気察知がいずれも高いことや食事に関するしつけが厳しい傾向にあることであり，コミュニケーションの低さや子どもの欲求優先が高く，暖かい雰囲気が少ないと更に摂食障害の中核症状が高まると言える。一方で，食を介して親との肯定的な相互交流を経験している場合には，自分や他者を信頼でき，自身の内的な状態を理解でき，コントロールできるという感覚を持てる傾向にあるということも明らかとなった。以上の結果は，食を介した母子相互交流が青年期の摂食行動異常のみならず，人格形成や情緒発達の根本的で重要な部分にも影響を及ぼす可能性を示唆している。子どもの心の健康や親子関係，家族のまとまりには，一緒にそろって食べることよりも食事中の雰囲気や会話の方が重要であるということが指摘されているが（平井・岡本，2003，2006；川崎，2001；黒川・小西，1999），本結果は摂食障害の中核症状や関連する自他への信頼感や完全主義，無力感といったパーソナリティにおいても小学生時代の家庭における食卓場面での母子相互作用のあり方が重要となることを明らかにしたと言える。食育の重要性が指摘される昨今であるが，食事に関する内容について教育することや家族全員が一緒に食べることに捉われるよりも，そこで母親が子どもを思いやりながら食事を作り与え，そのような思いのこもった食を介した母子の関わりが生じるかどうかがより重要であることを示唆していると言える。なお，下位尺度得点のプロフィールから「平均的相互交流群」とした247名の群は，度数が最大であることや食卓経験の尺度得点が平均値に近いことから平均的と命名したが，摂食障害傾向では「肯定的相互交流群」よりは「相互交流不安定群」に近い得点を示した。この群は「母親への気遣い」が最も高く，次いで「母親の雰囲気察知」や「父親の影響」がやや

高いが，これらの特徴が現代の食卓交流の平均的な実態であるのか否かについては今後更に検討が必要と思われる。

食卓での経験が摂食障害傾向に及ぼす影響

重回帰分析の結果，「過食」においては性別に関わらず「子どもの欲求優先」からの影響が認められた。表面的には，子どもの欲求を満たし子どもに不快な思いをさせず，子どもの思いに添っていると思われる母親の関わりは，青年期の過食傾向という摂食行動異常に影響を与えることが示された。また，性別に関わらず「食事に関するしつけ」も「過食」に影響していた。花澤（2008）は，食べる行為には，他の生物の命を犠牲にしているということから攻撃的な側面があることを言及し，摂食障害の過食の仕方には攻撃性が現れていることを示唆している。小学生時代における毎日の食卓場面において，母親から支配的で厳しいしつけを経験し，依存し愛されたい対象でもある母親には攻撃性を向けられず，自身に向けかえることで過食が引き起こされる可能性も考えられる。更に，安藤・山田（2004）は，小学生時代の母親の支配的な養育態度が食卓場面におけるしつけとして現れた場合，青年期の食事の制限や食事へのとらわれに影響することを明らかにしており，食卓場面での親子の心理的交流の在り方は，食卓場面以外の親子関係の反映であると考えて介入する必要があると思われる。また，齋藤（2004）は，女子大生における大学生時における食卓におけるしつけに注目し，その中の「母親の食事情報」と「母親の好み反映」がEAT-26で測定する摂食障害傾向を助長することを報告している。本調査では，性別に限らず「過食」に関してはいずれも「食事に関するしつけ」が有意な説明変数となっており，EDIを用いた場合でも，親からの食卓に関するしつけは摂食障害傾向を助長する重要な要因であることが明らかとなったと言える。

田中（2003）は，幼少期以降の食卓での経験による摂食障害傾向への影響は，女性よりも男性の方がより関連があることを示していたが，本調査では「肥満恐怖・体型不満」「内部洞察」「過食」３つの中核症状では，女性では３尺度すべてにおいて標準偏回帰係数が有意であったが，男性では「内部洞察」では有意な説明因子はなく，更に男性よりも女性のほうが小学生時代の食卓場面の影響が強いことが示され異なる結果を示した。田中（2003）は，食卓場面での両親の行動の影響について父親と母親とを別の尺度で分けて検討しており，摂食障害傾向には同性の親の行動の方がより関連することを示唆しているが，本調査では母子の関わりや相互交流の体験に着目して尺度を構成したため女性への影響の方が強かったことが考えられる。また，本研究では田中（2003）が用いたEAT-26には含まれていない「内部洞察」において，食を介した母子の情緒的な交流の在り方が自身の内的な状態の混乱に影響することを明らかにしたが，摂食障害者の本質的な問題として自分の欲求や感情が分からないことにあるという見解（Bruch，1978／1979）を支持した結果と言える。

本研究の限界と課題

本研究では，小学生時代の家庭における食卓場面での主観的経験を幅広く捉える尺度を作成したが，「子どもの欲求優先」因子は，自由に好きなものを買えるという経済的な裕福さを前提にした項目内容が含まれている。今後は家庭の経済的状況に影響されにくい項目を新たに考える必要があると言える。また，尺度の実用性を踏まえると，回答者の負担を考慮し，質問項目を削減した信頼性と妥当性の伴った尺度改定が今後必要と思われる。あるいは，本研究では摂食障害傾向を測定する尺度としてEDIを間隔尺度に修正して回答させたため，本結果で摂食障害傾向の臨床的妥当性まで言及することには無理があると言える。加えて学童期の食卓経験で青年期の摂食障害傾向を説明することにはR^2値の値を見ても限界があり，今後は他の様々な要因も含めて摂食障害への影響を検討する必要があると言える。

引用文献

足立己幸・NHK「おはよう広場」班（1983）．なぜひとりで食べるの ―食生活が子どもを変える―．日本放送出版協会

安藤嘉奈子・山田瑞恵（2004）．過去の食卓状況が現在の食行動に及ぼす影響について～母親の養育態度や食事作りの態度との関連を中心に～ 共立女子大学家政学部紀要，**50**，103-114.

Bruch,H.（1978）. The Enigma of Anorexia Nervosa ―The Golden Cage－Harvard University Press Cambridge, Massachusetts. 岡部祥平・溝口純二（訳）（1979）．思春期やせ症の謎 －ゴールデンケージ－．星和書店.

Chatoore, I., Geston, P., Menvielle, E., Brasseaux, C., O`Donnell, R., Rivera, Y., & Mrazek, D.（1997）. A Feeding Scale for Research and Clinical Practice to Asses Mother-Infant Interactions in the First Three Years of Life. *Infant Mental Health Journal*, **18**，76-91.

千須和直美・北辺悠希・春木 敏（2014）．中学生の家庭における共食とボディイメージ，ダイエット行動，セルフエスティームとの関連．栄養学雑誌，72，126-136.

江崎由香里・別府哲（2012）．小学生の親子関係と共食観および食卓の雰囲気との関連．日本家政学会誌，**63**，579-589.

Garner, D.M., Olmstead, M.P., & Polivy, J.（1983）. Developmental and validation of a multidimentional eating disorder inventory for anorexia and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, **2**, 15-34.

花澤寿（2008）．摂食障害における過食の病理性について ―「共食」との関係からの考察―．千葉大学教育学部研究紀要，**56**，257-260.

長谷川智子（2012）．食発達からみた貧しさと豊かさ：飢餓と肥満を超えて．発達心理学研究，**23**，384-394.

平井滋野・岡本祐子（2003）．食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連．青年心理学研究，**15**，33-49.

平井滋野・岡本祐子（2005）．小学生の父親および母親との心理的結合性と家庭における食事場面の諸要因の関連．日本家政学会誌，56，273-282.

平井滋野・岡本祐子（2006）．家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連．日本家政学会誌，**57**，71-79.

生野照子（1989）．親子関係と“食”．心身医学，29，277-283.

今田純雄（2004）．日本における食環境の変化と食行動．広島修道大学論文集，**45**，1-16.

今田純雄（2005）．食べることの心理学 ―食べる，食べない，好き，嫌い．有斐閣選書．
石川清・岩田由子・平野源一（1960）．Anorexia Nervosaの症状と成因について．精神神経学雑誌，**62**，1203-1221.
伊東暁子・竹内美香・鈴木昌夫（2007）．幼少期の食事経験が青年期の食習慣および親子関係に及ぼす影響．健康心理学研究，**20**，21-31.
岩村暢子（2010）．普通の家族が一番怖い ―崩壊するお正月，暴走するクリスマス―．新潮文庫．
岩村暢子（2012）．家族の勝手でしょ！―写真274枚で見る食卓の喜劇―．新潮文庫．
加曽利岳美（2005）．中学生の抑うつ傾向および学校不適応傾向と食行動との関連．心理臨床学研究，**23**，350-360.
川崎末美（2001）．食事の質，共食頻度，および食卓の雰囲気が中学生の心の健康に及ぼす影響．日本家政学会誌，**52**，923-935.
切池信夫（2009）．摂食障害50年の流れと将来の展望 児童青年精神医学とその近接領域，**50**，179-185.
黒川衣代・小西史子（1999）．食事シーンから見た家族凝集性 ―中学生を対象として―．家族関係学，**16**，51-63.
松木邦裕・安岡　誉・西岡昌久（1982）．神経性摂食障害患者の家庭内食卓状況について．心身医学，**22**，152-160.
松木邦裕（2008）．摂食障害というこころ．新曜社．
Minuchin, S., Rosman, B., & Baker, L.（1978）. Psychosomatic Families Anorexia Nervosa in Context. President and Fellows of Harvard College.（福田俊一（監訳）（1987）．思春期やせ症の家族 心身症の家族療法．星和書店．）
村上直人・大原浩一・大原健士郎（1991）．家族療法からみた摂食障害．心身医学，31，(2), 137-141.
森脇弘子・岸田典子・上村芳枝・竹田範子・佐久間章子・寺岡千恵子・梯　正之（2007）．女子学生の健康状況・生活習慣・食生活と小学生時の食事中の楽しい会話との関連．日本家政学会誌，**58**，327-336.
永田利彦・切池信夫・松永寿人・池谷俊哉・吉田充孝・山上　榮（1994）．摂食障害者におけるEating Disorder Inventory（EDI）の試み．臨床精神医学，**23**，897-903.
恩村咲希（2013）．大学生の回想する児童期の家庭における食事場面と現在の性格特性との関連．九州大学心理学研究，**14**，107-115.
大場眞理子・安藤哲也・宮崎隆穂・川村則行・濱田孝・大野貴子・苅部正巳・近喰ふじ子・五郷晋浩・小牧元・石川俊男（2002）．家族環境からみた摂食障害の危険因子についての予備的研究．心身医学，**42**，315-324.
大谷貴美子・中北理映・饗庭照美・康　薔薇・冨田圭子・南出隆久（2003）．家庭における食生活体験や親の関わり方が青年期後期の自己独立性に及ぼす影響．日本食生活学会誌，**14(1)**, 14-27.
大谷貴美子・浅野麻理子・山田優子・中北理映・南出隆久・畠中宗一・本村　汎（2000）．食生活体験が中学生の家庭生活満足度に及ぼす影響　―パスダイアグラム―．日本食生活学会誌，**11**，121-128.
齋藤千鶴（2004）．女子大学生の摂食障害傾向に及ぼす家族の食文化の影響．家族心理学研究，**18**，43-55.
外山紀子（2008）．発達としての共食 ―社会的な食のはじまり―. 新曜社.
滝川一広（1983）．＜食事＞からとらえた摂食障害 ―食事状況を中心に―．下坂幸三（編）食の病理と治療．金剛出版，pp.50-73.
滝川一広（1976）．＜食事＞からとらえたEating Disorders　―食卓状況を中心に―．季刊精神療法，**2(4)**，352-361.
田中志帆（2003）．食事場面での両親の行動が，思春期青年期の摂食障害傾向を規定する可能性．群馬県立女子大学紀要，**24**，255-273.
土屋芳子・大賀英史・小山　修・斎藤　進・佐々木　敏（2004）．高校生の孤食の実態とその要因 ―生活習

慣，食行動，家族関係，食卓イメージとの関連―．日本健康教育学会誌，**12(1)**，9-18.
山岡昌之（1999）．再養育療法（Reparenting Therapy）からみた脚本．交流分析研究，**24**，65-69.

付記

本論文は第２著者である平岡薫が追手門学院大学に2015年に提出した修士論文の内容を加筆修正したものである。本調査の実施に際してご協力頂きました赤間健一先生（福岡女学院大学），中谷桂子先生（大阪経済大学非常勤講師）にこの場を借りてお礼申し上げます。